

橋本恕氏（元大平外相時代の中国課長）に聞く

日中国交正常化交渉

― 聞き手・清水幹夫



日中国交正常化交渉を終えての記念写真。前列の中央が田中首相、右へ周恩来首相と大平外相。橋本課長は2列目左から2人目、森田秘書官は右から2人目（北京・1972年9月25日）

「一つの中国」と大平外相

去 華 就 実

——大平さんは第一次田中（角栄）内閣で八年ぶりに二度目の外相に就任したわけですが、まず最初に大平外相は、中国との国交正常化をめぐる問題点について橋本さんら省内の専門家から意見を出世、と求めたのですか。

橋本 いや、まったく違うんです。当時は外務省は中国との国交正常化に反対だった。法眼晋作事務次官以下ね。もっと正確に言えば、当時の外務省も、自民党も同じなんだが、田中内閣になる以前は、佐藤栄作首相自身もそうだったのだが、とにかく大陸を支配する中共政権 当時はそう言ったんだが 中華人民共和国政府と国交を持たないのは非常に不自然であり、おかしいと、それはいい。正すべきである。ただし、台湾の国民政府とは（外交関係を）切らない、切りたくない。要するに「二つの中国」なんですよ。それでは絶対に中国は正常化に応じるはずがない。

私はね、田中角栄さんが佐藤内閣の幹事長のときに秘書の早坂（茂三）さんと共同通信にいた麓（邦明）さんに、「是非ともウチのオヤジに勉強させてやってくれ」と頼まれて、何度も田中さんのところに行っていた。そこで角栄さんは私と二人だけで中国問題を勉強してたんですよ。それから大平さんは、当時は党内野党というか冷や飯組みだったでしょう。割合ヒマがあつたし、もともと中国問題をずっと考えていた人だから、たびたび私が話しに行ったり、大平さんのほうからよく電話がかかったりしていた。「この点はどうなんだ」とかね。

それで当時の外務省の中は、台湾の国民政府とは外交関係を切るべきではない、という意見が圧倒

的に強かったのです。私が大平さんと田中さんに連絡に行ったのは、台湾の国民政府との外交関係を絶つという覚悟、つまり、一つの中国ということでない、中国は絶対に正常化に応じませんよ、その決心ができなければ、いくら話したってムダです、と……。大平さんと田中さんと別個にいろいろ話しているうちに、その点は、お二人とも踏み切ったのですよ。

——田中政権になる前ですね。

橋本 そうそう。そしてね、昭和四七年（一九七二年）七月七日の田中内閣の組閣がなつて大平外相が初登庁してきて「橋本（中国）課長、大臣がお呼びです。すぐきてくれ」と秘書官から連絡がきた。何ごとか、と大臣室に行ったら、大平さんは人を遠ざけてこう言うんですよ。「夕べ、赤坂の千代新（料亭）で角さんといういろいろ政権構想を話した。党・政府の人事と政策だ。そこで田中と二人で是非とも日中国交正常化をやるうと決めた。ついては、自民党には中国問題特別委員会があり、その動きは知っているだろう。小坂（善太郎）委員長だ。外務省内も知つてのとおりだ。そういう状況のもとだから、ただちに正常化のいろんな準備が必要なんだ。キミは極秘裡に、早急に準備を始めてくれ」と。そしてね「このことは事務次官にも話をするな」というんですよ。これには一瞬、私も困つたが、「わかりました」とハラをくくつたのです。もともと私は、国交正常化をめくつては省内では孤立してしましたからね。これが大平外相初登庁の出来事で、日中国交正常化の始まりだったわけです。

——最大の問題は台湾の国民政府との外交関係だった……。

日中正常化と台湾

去 華 就 実

橋本 自民党の中も大変だったし、中国との正常化がうまくいくかどうかわからないのに、台湾の国民政府と断交する、なんて口が腐ってもいえないわけで、田中さんも大平さんも最後まで国民政府には礼を尽くしたのです。だから椎名さん（悦三郎・元自民党副総裁）にも特使として台湾に行ってもらった。

——中国側の事情はどう見ていたのですか。

橋本 当時、中国にとつて最大の問題はソ連の脅威だった。ソ連が中国に核攻撃を加える可能性が非常にあった。ソ連が中国を攻撃した場合、米国が助けてくれる、なんて幻想は抱いていない。しかし、少なくとも二正面作戦はとりたくない。米国が日本を基地にし、日本も米国について、中国がソ連から攻撃を受けているとき、後ろから米国、日本からやられるということは国家滅亡ですからね。だから最大限、中立を守ってもらわにゃいけない。そこでキッシンジャー（大統領補佐官）を受け入れ、ニクソン（米大統領）の訪中を受け入れた。ただし、中国としては日中国交正常化は、佐藤内閣ではどうしてもできない、佐藤内閣は国民政府との関係があまりにも強過ぎると考えていた。佐藤内閣時代もいろいろやったし、キッシンジャーをもじって「ミノベンジャー」とかかって美濃部さん（亮吉・都知事）が親書を持って行ったことがあったが、中国はそれを封をしたまま返す、ということだね。中国は、日米を味方とまではいかんけれども中立しておく大きな外交戦略はあるのだが、それだからといって、米国にしる日本にしる、国民政府と断交しなくてもいいですよ、とはなんとも言えない。

——そして、いよいよ九月二五日に田中首相、大平外相、二階堂（進）官房長官が訪中し、北京入りしたわけですが、交渉は冒頭から難航したんですね。

橋本 田中・周恩来会談というのは北京入りしてから四回あるんですよ。毎日一回ね。もちろん大平さんも私も同席していましたが、一回の会談時間が長いのです。二時間が三時間も……。それとは別にね、大平外相と姬鵬飛外相会談が、公式には三回か四回だったが、それ以外に非公式に何度も何度もあったのです。田中・周会談は毎日午後。そこで大平・姬会談は午前中、何回となくやった。訪中して三日目に田中首相ら一行は万里の長城に出かけたのですが、その往復の車中でも大平さんは姫外相と会談していた。そこでいろいろな詰めをやった。

——長城への往復の車中とあつては、文字通り密室会談でしたね。

橋本 私は助手席に乗っていた。両外相のほか、あとは中国側の通訳だけ。当時は、いい道路がなかったから、片道一時間半近くかかった。この車の中の「密談」を通じて、中国側は日中国交正常化ができれば日本は台湾の国民政府と間違ひなく断交するな、という心証を得たと思います。

——問題は最後まで台湾だったんですね。

橋本 日本が「二つの中国」の立場をとっていたら、正常化交渉は何年がかり、いまだに決着がついていないでしょう。日韓正常化を見ても、長い時間がかかっているが、この日中正常化はね、わずか四日間、三泊四日の会談で、あれだけ多年の懸案だった、正常化を一挙に成し遂げたんです。それは、大筋をいえば日本が一つの中国に踏み切ったこと。つまり、中国側の主張する「一つの中国」を受け入れたこと。それと、今度は中国側がそれまで毎日あれだけ非難していた日米安保条約を容認し

実たこと。そして、中国が賠償を放棄したことです。これで正常化はできるんです。私は大平さんと二人きりで、あるいは田中首相も入って、北京にいる間も公式行事がないときは宿舎の迎賓館でいろいろ打ち合わせをしましたが、とにかくね、日米安保条約絶対反対と言われ、それに賠償までとられるのなら、正常化はできないし、やるべきではない、ということだったのです。しかし、この二つの問題の対応については、中国がいち早く事前に日本側に伝えてきていた。たとえば「竹入（義勝・元公明党委員長）メモ」がそうですね。

日米安保条約との関係

橋本 そう。竹入委員長が七月二五日から八月三日まで訪中して、周恩来首相の言ったことを克明に筆記して帰ってくるわけです。しかも竹入委員長は、重大な問題だからと念を入れて、メモを書き直して、「これでいいですね」と周首相に確認済みのメモなのです。これが田中首相に渡され、田中さんから大平外相に渡され、大平さんが私に四七年八月に渡すわけです。

——そのメモを見てどうでしたか？

橋本 これなら、いけるかもしらんなあ、と。ただ、これはあくまでも間接的なものだから、北京での交渉中、首脳会談で周恩来首相が直接、確認したのです。こちらは、中華人民共和国政府との国交正常化ができる前提で、国民政府との外交関係を絶つ、と。それによって日華平和条約は消滅するわけだが、九月二九日の日中共同声明調印式後に大平外相が行った記者会見では、「日華平和条約は

歴史的使命を果たし終えた」という意味の表現にした。むくつけき表現で「国民政府と断交」なんていうと相手もねえ……。最後まで礼を尽くす、ということだった。田中首相も大平外相も。

——ここまでに至る交渉で難しかったのは？

橋本 こうしたことをヨイドンで同時進行でやらねばならなかったこと。いいところだけつまみ食いされたのでは、お互いにたまらんからね。

——訪中の前に田中首相と大平外相は、ハワイでの日米首脳会談に臨んでいます。そこで確認された「日米安保堅持」に、中国は格別の反応を示さなかった。

橋本 うん、日米安保反対をいい続けると田中・大平両氏は正常化に応じないことは中国側もわかっていた。大平さんは日中正常化に対するアメリカの反応も慎重に見極めていたが、もう一つ、ソ連の反応も非常に気にしていた。中国とはうまくいった、しかし、アメリカ、ソ連との関係がうまくなくなる、というのでは困るからね。もっとも、ソ連は日中国交正常化に反対できるわけがないんだ。自分は中国と外交関係をもっているのだから。

——話は少しさかのぼりますが、九月一日には橋本中国課長を団長に日本政府の先遣団が訪中しています。ここでは、かなり具体的の問題を詰めたのですか。

頭を悩ませた「日中間の戦争状態」

橋本 それはこういうことだったのです。当時は中国には日本の大使館がない。暗号電報を打つ設

実備もないわけです。もっとも、国交正常化交渉には田中首相、大平外相のほかに二階堂官房長官も一緒に行かれた。ということは、交渉の途中で本国に（暗号で）請訓する必要がないんだが、コミュニケーションの手段が必要だった。とにかく、航空路もなかったのだから、日本のパイロットで北京に行った人は一人もない。香港回りなんて悠長なことをしてられない。どうやって安全に飛行機を北京まで飛ばすか、という問題がまずあった。そのほか、テレビ中継のための中継基地の設置、治安問題、セキュリティをどうするか、電話をどうするか、等々、田中・大平訪中までに解決しなければならぬ問題が、山ほどあった。これらの準備をすべて整えるために、私が関係方面の専門家を頼んで、団長として訪中した。

——正常化の中身については？

橋本 北京に着いたら、姬外相が私に会いたいと言ってきた。私は一介の課長に過ぎないが、会談を断る理由もない。行ってみたら田中さん、大平さんがどんな対応で国交正常化交渉にくるのか、約二時間もの間、取材されましたよ。

——実際の交渉では、やはり台湾問題で冒頭から難航したわけなのですね。

橋本 一日目で敵しかったのは台湾ではなく、日中間の戦争状態の問題です。第一回の大平・姫会谈でお互いに挨拶をしたあと、大平さんが、法的には続いている日中間の戦争状態をどう終結させるかについて、「高島（益郎）条約局長に日本側の考えを説明させる」と言って、それで高島さんが説明を始めた。一九五〇年、日本は台湾の国民政府との間で日華平和条約を締結した。中国という国と日本との戦争状態は、その日華平和条約をもって終結した。従って、日本と中国の間に戦争状態は存在

してない、と主張した。

——中国側は？

橋本 第一回の外相会談はそこまでで時間切れになった。そこで午後からの第一回田中・周恩来会談です。それから毎日やったこの首脳会談は、双方とも四人四人でやったのです。日本側は田中、大平、二階堂、それに私。中国側は周恩来、姬鵬飛、廖承志、韓念竜。そのとき周恩来が開口一番、高島局長を猛烈に非難するわけです。けさの外相会談での日本側の局長発言は、まさか田中、大平両氏の真意ではないと私は確信する。だいたい、一九五〇年に日華平和条約を締結したというけれども、台湾の国民政府は四九年に大陸から逃げ出したのだ。一九五〇年といえば中華人民共和国政府はとくに中国を支配している。国民政府はわずかに台湾しか支配していない。その国民政府が全中国を代表して日本との戦争状態を終結した、なんてとんでもない話だ、とまあ、痛烈に批判するわけです。

——「あれではケンカを売りにきたのか交渉にきたのかわからない」と周首相は口を強めて非難したといわれていますが。

橋本 ケンカを売りにきたのか、という言い方ではなかったが……。要するに、高島条約局長の発言はこういうことなんです。戦後、政権が代わったのならまだしも、ずっと長い間、一、二の例外はあっても大部分の時間は自民党内閣が続いているわけです。そこで、政府は国会においても内外に対しても、五〇年の日華平和条約をもって日本という国と中国という国との戦争状態は終結した、とずいっと一貫して主張してきたのです。それを、七二年の時点で、実は日本政府はこれまで二二年間もずっと、そう言い続けてきましたが、あれは間違っていました、とは、なんとしても言えないのです。

実よ。日本政府は二二年間も国民に対してウソを言い続け、世界をだましてきた、とは口がさけても言えない。自民党内閣でなければ言えたかもしれらん、あるいは。それで弱っちゃったんですよ。一方、中国政府は日中間の戦争状態、そのまま統一していると強く主張してきた。

去華 — それで第一歩から難航したのですね。

「不自然な関係」という文学的表現に

橋本 その夜は公式行事もなかったもので、釣魚台の宿舎に帰って、田中、大平、二階堂、高島、それに私と、あと秘書官ら一人、二人、内輪でメシを食った。ところが、大平さんは真面目な人ですから、じーっと考えこんでハシをとらないんですよ。一方、田中さんはマオタイをがぶがぶ飲んで、かなりできあがつて「なんだ、お通夜みたいだな、おい、メシを食おうや」と言っただんですが、「そうは言ってもなあ」と大平さんがハシをとらないから田中さんも遠慮してね。ましてや高島さんや私らはシユンとして……。高島局長だって、いまさら二二年間、日本政府は間違っただけで、なんて言えるわけがないのだが、それにしても、とりあえずは自分の発言でこうなった、というわけだね。そしたら田中さんが「大学を出たヤツはこういふときはダメだなあ。修羅場に弱い」と言い、大平さんが「そんなこと言って、じゃ、明日からの交渉はどうやってやるんだ。今日は周恩来に一方的にしゃべられて時間ぎれになった、こんどはこちらが反論するなり、こちらの考えを言っただ。どうやってやるか……」と言うと、田中さんがね、ニヤリと笑って、「君らは大学出てるんだろ？ 大学出たヤ

ツが考えるんだ」と言つたので、みんな大笑いになった。そこで「とにかくメシを食およ」となって、大平さんも気をとりなおしてね、大平さんはあまり酒を飲まないが、ちょっと飲んで……。食事をしながら田中さんは「オレは越後の雪の中じゃメシが食えんからな、それで東京に出てきたんだよ」というと、大平さんも「そうなんだよ、ボクも田舎では食えないから東京に出てきたんだ」と和気あいあいになった。

——で、「戦争状態」はどのようになつた？

橋本　その後で大平さんと私とでいろいろ相談してね。要するに、中国側の主張する「五〇年以降七二年までの戦争状態」というのは、あくまで過去の解釈に過ぎない。現実に撃ち合いをしているわけでもないし。今回の正常化というのは日中が国交を正常化するだけでなく、同じアジアの友邦、隣邦として仲良くやっていくという目的で話をしている。それなのに、過去の解釈だけにとらわれて本体の正常化の話に影響するというのはおかしい、と。双方とも、過去はすべて忘れようとは言わんけれども、きょうから以降、現在および将来についての善隣友好関係が何よりも大事だ、という対応で臨むことにした。そして、二二年間の関係については、こういう説明でいこう、つまり「不自然な関係だった」と。戦争状態にあった、無かつたと、そういう法律問題でいくから話がおかしくなる。文学的表現でいこう、となつたんだ。戦争状態にあった、といえば中国はOKだが日本が困る。しかし日本がいうように、平和の状態にあったといえれば、今度は中国がおさまらない。そこで、困りぬいて私が「不自然な関係」という表現を大平さんに進言した。大平さんは「ウン、それしかないな」と。だから共同声明にもそう書いてあるんですよ。

実 —— これで中国側も譲歩するわけですね。

就 橋本 ただ中国もね、これでけんかをする気はないんですよ。過去の解釈ですから。周総理も『自然な関係』を受け入れた。

去 —— 交渉術として最初にぶつけてきた？

橋本 一種のプラフだろうね。「あれは高島の考えであって、まさか、田中、大平両首脳の考え方ではないと私は思う」と周恩来はちゃんと言っているんだから（笑い）。高島局長だって事前に大平外相と打ち合わせして外相に代わって発言したんだ。もちろん田中首相も承知していた。ただ、大平さんがそこで「私も高島と同じ考えだ」と言ってしまったのは、交渉がパーになっちゃったからね。

—— 田中、大平両氏は絶妙なコンビだった。

田中首相は中身は大平さんにまかせた

橋本 田中さんという人は宇宙森羅万象、内政であれ外交であれ、すべてについて自分の意見をいっぱい持っている人だから、誰かがひとこと言えば、わあわあつと言うんですよ。ところがね、この正常化交渉では、中身は大平さんにまかせた。ひとことも言わなかった。いかに大平さんを信頼していたか、ですよ。「あのなあ、大平よ、しようがないじゃないか、このまま友好訪問だけになったんじゃ、おまえら何しに行ったんだ、と言われる。国内はもたん。だが、政治責任はオレがすべてかぶる」と言っていましたかね。正常化交渉では大きなことから細かい問題まで、すべて大平外相にまか

せた。政治家の関係は狐と狸の化かし合いみたいところがあるが、こんなコンビはあまりみたことがない。

——訪中して三日目の夜、突然、毛沢東主席との会談となるわけですが、これで交渉はヤマを越えたと感じたのですか。

橋本 いや、「不自然な関係」は決着したのだが、賠償問題はまだ残っていた。この賠償ではね、周恩来首相が泣かせるんですよ。二日目の午後、周首相はこういう言い方をしたんです。これまで中国は日本を含め列強から何度も賠償金を取られた。日清戦争のあと清朝が日本から取られた賠償金は当時の日本の国家予算の半分にもおぼった。これは清朝が払ったのではなく、結局は中国人民から吸い上げたカネを支払ったのだ。賠償というのは、為政者ではなく、結局、何年、何十年にもわたって人民に支払わせることになるんです。これから仲良くしようとしている日本人民に、この苦しみを背負わせるのはしのびない。したがって賠償は一銭もいたしません……と。それまで中国は公式には日本の軍国主義による侵略、すなわち日中戦争によって一千万という人間が虐殺され、終戦時の評価で五〇〇億兆ドルにもぼる損害を受けた。したがって中国は日本に賠償を要求する権利を留保する、という言い方で一貫していた。それを周恩来がきっぱりと「取らぬ」と言ったのだ。これは泣かせるものでした。これでだいたい大きな問題は終わり、そこで毛沢東主席と会わせる、ということになったのです。

——実質的な交渉はそれで終わった？

最後まで礼を尽くした台湾問題

橋本 共同声明が調印された四日目の首脳会談では台湾問題が議論となった。ここでの台湾問題というのは、日中国交正常化後の日本と台湾の関係だ。周首相が口火を切り、「これでわれわれの方は、今後の日本と台湾との関係を除いて大きな問題は終わりました」と。そこで大平さんは、前の晩、私が書いて渡した紙を読みながら、日本と台湾は、もちろん外交関係は切れるが、しかし、貿易、漁業、人の往来などは引き続き行われる。貿易や人の往来となれば、船の運航や航空機を飛ばさねばならぬ……とまあ、一言でいえばこんなことを説明した。聞いていた周恩来は一言も反論せずに、「結構です。どうぞそのようにおやり下さい。中国としてはなんの異存もありません」と、きっぱり言ったのです。そのあと、周首相は（台湾の）「蔣経国というヤツは」、とまたひとしきり言っていた。「あいつはならずものですよ」なんてね。もっとも、周恩来は彼をよく知っているんですよ。田中さんも大平さんも、相づちも打たずに聞いていましたかね。こんな雑談のあと、周首相が「いよいよこれですべて終わりましたね」と言った。ところが「イヤ、まだ残っている」と田中首相が持ち出したのが尖閣列島問題だった。周首相は「これを言い出したら、双方とも言うことがいっぱいあって、首脳会談はとてもしゃないが終わりませんよ。だから今回はこれは触れないでおきましょう」と言ったので、田中首相の方も「それはそうだ、じゃ、これは別の機会に」、ということと交渉はすべて終わったのです。

——田中、大平氏ら一行が最後に上海に寄ったのは、やはり中国側の強い希望だった？

日中国交正常化交渉

橋本 当時はね、中国の国内情勢はいわゆる四人組が完璧に押さえていた。四人組の本拠地は上海です。ところが田中首相は上海に寄るのはいやだ、と言つてきかなかつた。日本に帰つてやるのがヤマほどあるんだ、という。すぐ帰りたい、というのです。中国側は是非行つてくれ、と何度も言つてきていた。田中さんは「夢の四馬路にでも行くのならなあ」と、どうしてもうんと言わない。困つた中国側は「周首相が上海までこゝ結しますから」と言つてきて、田中さんも、それじゃ「周さんの顔を立てよう」、ということになつた。上海では張春橋主催の宴が開かれたのだが、周恩来としては、四人組に礼を尽くした、という形にしたかつたのですね。

——帰国の途についての機中では？

橋本 お二人ともさすがにお疲れの様子で、特段の対話もなく、静かに日本に向かつたのです。

(平成一二年四月四日、橋本恕事務所取材)

橋本恕(はしもと・ひろし) 一九二六年徳島県生まれ。五三年東大法学部卒、同年外務省に入省、六八年アジア局中国課長、七三年在中華人民共和国大使館参事官、七四年在連合王国大使館参事官、七九年大臣官房外務参事官、八一年大臣官房審議官、八一年情報文化局長、八三年アジア局長、八四年シンガポール国特命全権大使、八七年エジプト国特命全権大使、八九年中華人民共和国特命全権大使、九三年二月退官、三月から神戸製鋼所特別顧問に就任、現在にいたる。